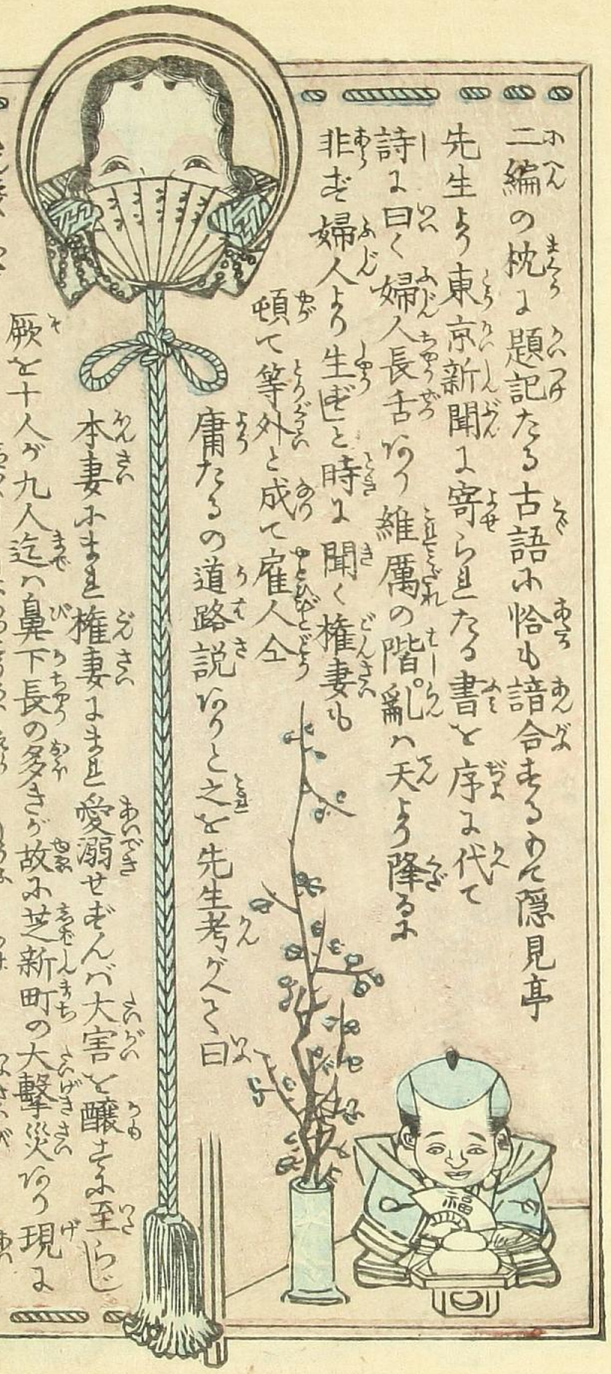
五人殲苦魔物語
櫻澤堂山編輯
外題 唐性筆
三編
上
中
三編
柳水亭種清作
櫻齋房種重
三編
下

五人殲苦麿物語
櫻澤堂山編輯
外題 唐様筆
三編
上

A 463
3 上

二編の枕に題記たる古語に恰も諳合まるゆえ隠見亭
先生より東京新聞に寄らるたる書と序に代て
詩に曰く婦人長舌なり維厲の階亂は天より降るに
非ず婦人より生ぜと時に聞く権妻も
頓て等外と成て雇人仝
庸たるの道路説いろと之を先生考ゑて曰



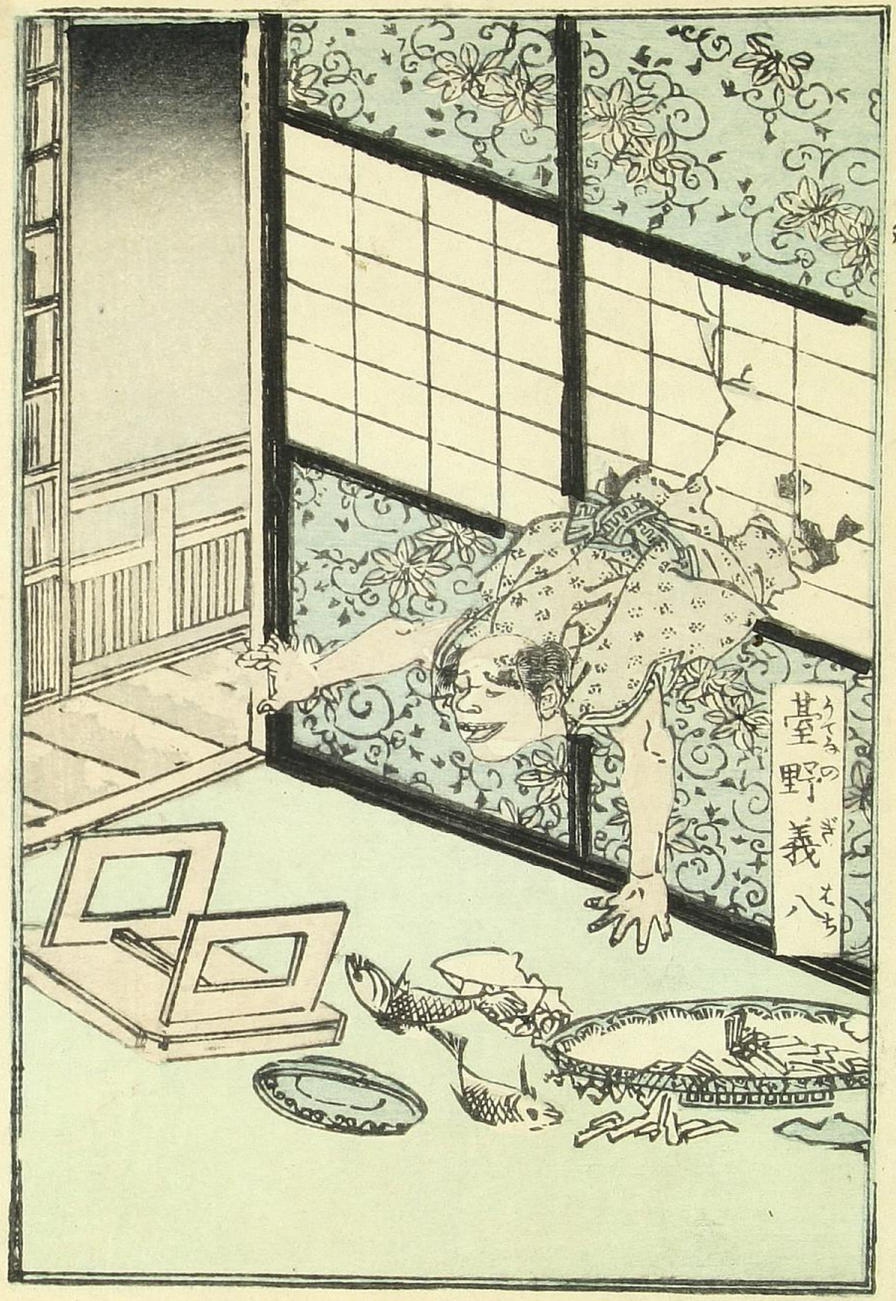
厥を十人が九人迄は嚢下長の多きが故に芝新町の大撃災より現に
本妻に権妻に愛溺せざんば大害を釀さに至り
嘆息の至りなるかな蜀志の諸葛孔明は撰んで醜婦と妻とて曰妻美なれば愛に
溺れ大事を洩すと又明の鄭氏は婦人の詞を用ひざて其家長久まと謂へり噫難い
哉這綽請看よ額の於亀女が何に言いで唯吟々然るに過失無の證とやせん乎

明治十二年三月中澣偷於園々社下之暇　柳水亭種清記

48-8162

車夫
新吉
三出
吉濱
文之助
朝香
春章

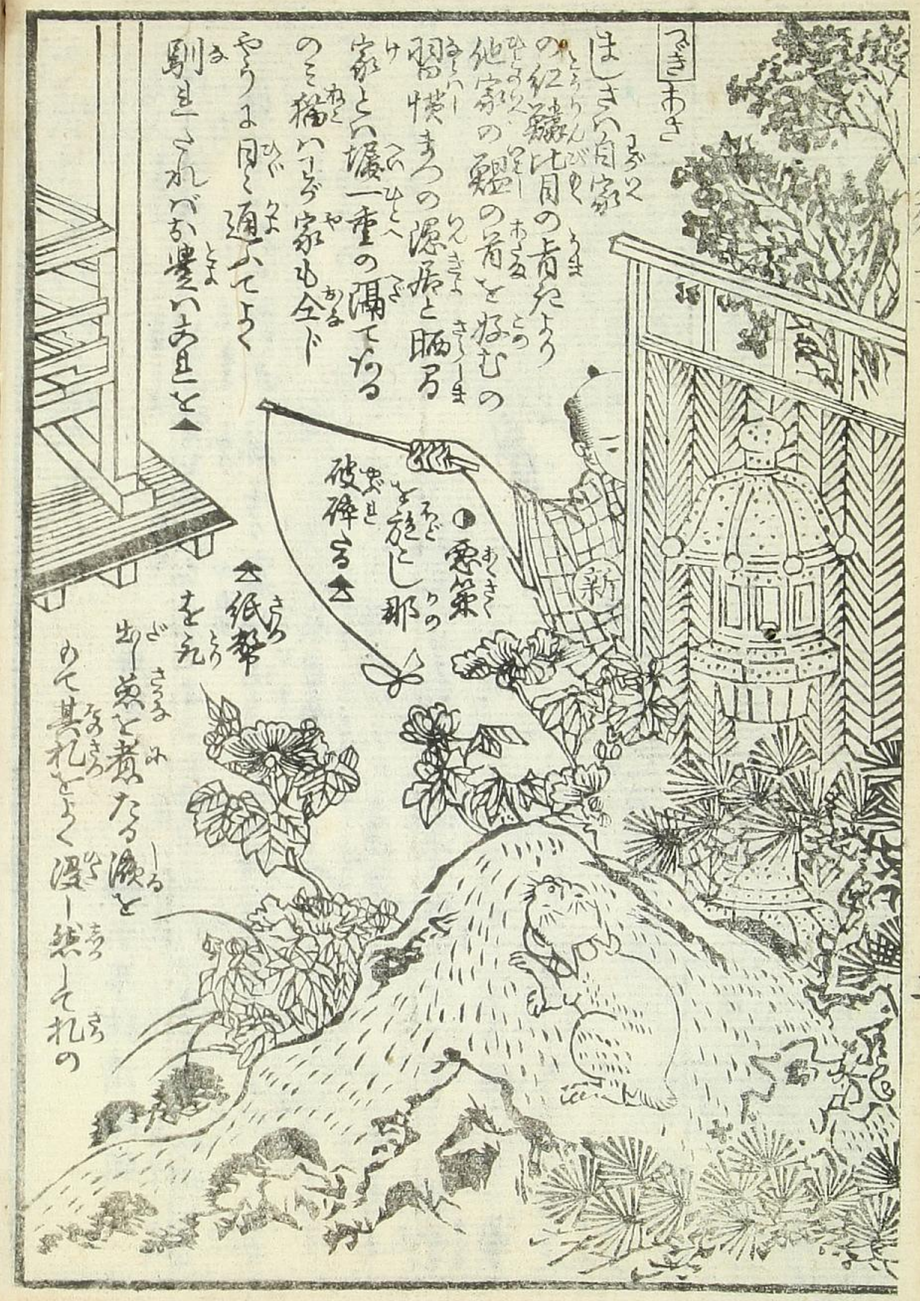
三出
冬木
阿豊

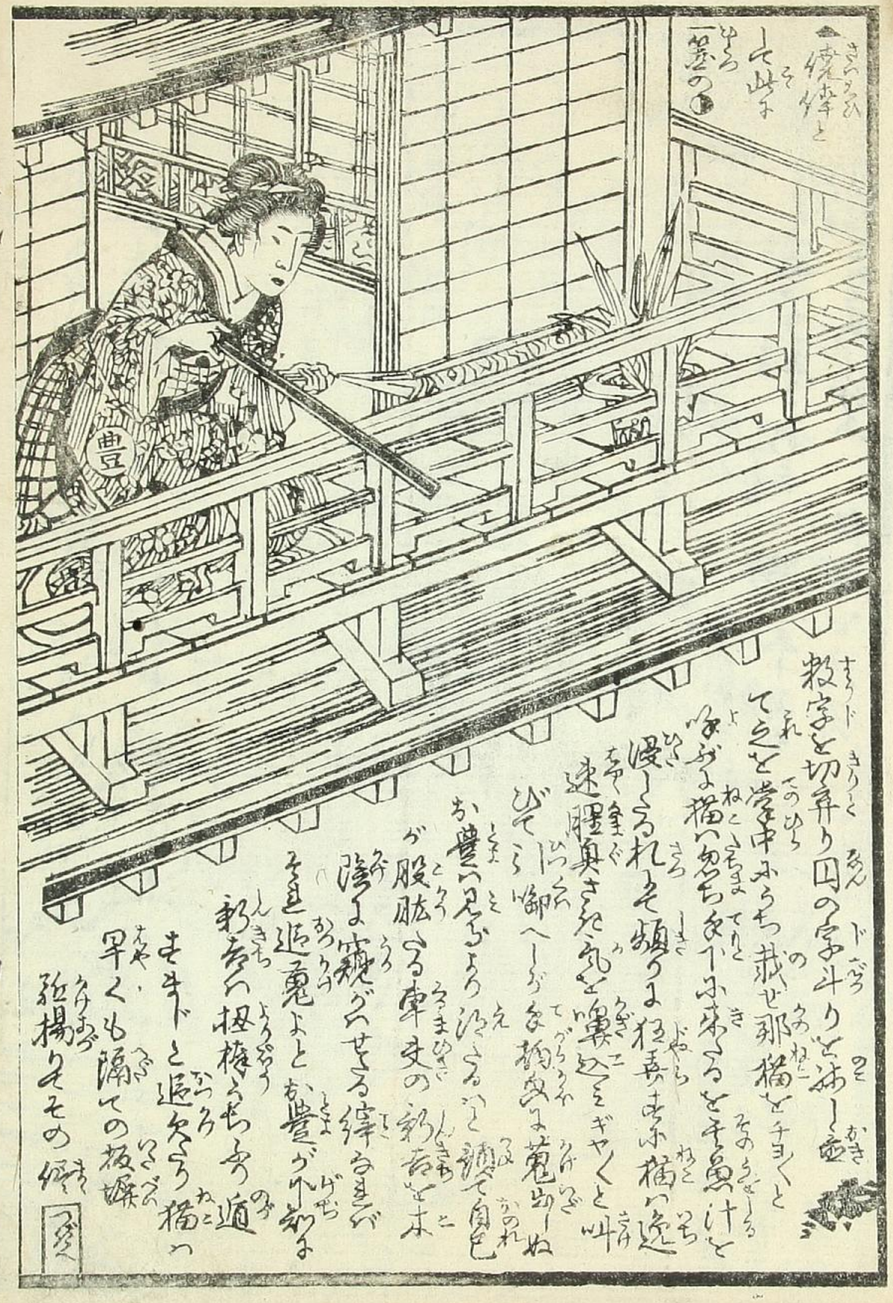


五人獵苦魔物語三編の上

東京　柳水亭種清編輯

二編より続残しける裂紙幣と活用るさんとまるお豊が杆計の孫とのみい這脚間家の隠家より松の隠居と称する寡婦なりし舊時い孫も多かり頃せー家と見えて最豊焼みるのみあるを人ぶも孫なくして文字ふも瞭識安舌も亦統達の現今家エ雲書き出べき見孫もなけれバ乏とり必ず猫とのて兒孫のごとく寵愛す猫といへども活る家エ養はるい某苑中号の人ぶ鶏りて後得美肉飽まで食ひ飽ぶ


つぎあさ
はしさい自家の紅鑢比目の青たろ他家の魚の者を好むの習慣まつの源兵と晒弓家とい堰一重の隔てなるのを猫いまつ家も全ド
やうは日く通ふてよく
馴且されば豊いあ且と
悪菓
彼碑弓
紙幣を元出し弟と貴たる源とのて其れとよく浸し然してれの


豊
彼碑と比べ
一葉の
数字を切弁り四の字斗りを拙し亟
てらと学中ふちち戒せ那猫とチョくと
ゆぶよ猫い勿ち色ハふ来るを半魚汁と
漫しるれそ頻りよ狂喜ふふ猫い遠
迷惑真さ死乳と嘆こ裏込てギやくと叫
びてら御へーが多猫ふよ蒐出ーね
お豊い足ぶろ泡ふると頭て自色
が股肱る車文の新右ふ木
浩よ寵ぐいせる絆なまば
ふ且遠鬼よとお豊ぐ小新よ
新右い拙棒ふ書ふ遁
ふキドと遠ふふ猫い
早くも源ての板嫌
弦揚りそその紙

つき

ひろう家へあげ投りたり
彩雲の煙際まで延蔓しぶ猫
と俱よ雪煙とりけ勝るこみゆ
佳うも忙然として眺めて居るを
お豊い程礼のごとたさ為を
ゑー「コヤ彩雲の召のる投めゞ
方今藤家の猫の
都へて逃しゝ倒く
捨捨よるゝぬの
又十四の紙幣るる
お早く蔓付けとるゝ佳たる
猫を捕へて元戻しく来るべー
と器くしく罵り来る彩雲
やとゝ注意ひらめしげお
紙幣を一枚ひつ

大丸屋

貴家の

猫グ又十四の

豊

逃く
と云つて
仕されと
ひ此家
の後

輝ゲ
あちこち
藤家の
門へ紙せ
ま
号
傷
て
ゑ
ムこと此方の
蔓へ
逃げ
込んだる
ぞ
ぐち
よろ
同女
中
きて其事を
ごらん
居さ為よ
申入るを
輝ゲ
あちこち
あちこち
駆る

つゞき

おれどのゝ更ゝ動
ぎる乳をもまくり女よ
佛くさく云さ一むるゆう
ぎるゝい怪一くゝね何を
云くゝくゝのゝる紙幣ハ
猫の食さぐき物よなゝぎ
首所ゝうの世後ふも猫よ
小判とゝゝ何ハ猫ハ殘金ハ
聊顔ても見ぬ孫ゝゝり
仮令紙幣ふも せよ
縁なゝく猫の△

△掠るべき
縁故ゲのゝらうぞ所得
ゆくくゝ云さ一むるゆう
ぎるゝい怪一くゝね何を
云くゝくゝのゝる紙幣ハ
猫の食さぐき物よなゝぎ
首所ゝうの世後ふも猫よ
小判とゝゝ何ハ猫ハ殘金ハ
聊顔ても見ぬ孫ゝゝり
仮令紙幣ふも せよ
縁なゝく猫の△

△あの
お隣家の
四郎造よ
よくさゝう
まをて下
さゝと木で
鼠とる挨
投ハ猫のわ
猫と新吉ゲ
逆捻金

つゞき

ゑくと笑ひ

て無駄うそだのあへ

さつと待ふるまへお豊へ

庖丁と後を立ちつて且

角ゝ持て利を北よ

相ても波れをう返さを

面べきうと脱殺うと

いで彩ちつも玄関番よ

渡宮ゝ臣隠居さ為よ

金さうと

ゝ

お松どのハを且を安治矣ひゝの立出て

「立ちく」お濱家の臣彩造へ紙お出

▲彩の幸その

れを元返さて下さへ

彩の臣用のおそをうトのゝおお豊い報込んで

「彩の臣用ゝ立ちくゝの方今

も家の彩造

をゝて下して

よさ世方の

猫ゝ咱家の

五十四のれ

と引咱へて

い方の郎中へ

犯込ざれへ

まセトの猫の

始極と笑ふ

仰せらるお参さ為うる

茶仏て下もごとく

猫みゝ

ゝ小判の

由ゝ元馬へ

猫の臣押込んでも

咱へて来べき筆ち

つゞき

あへなのまつ小宰くしのとゝ云ふ云ふぬあてはまり
ままゝ云ふも云てもイヤもう〻言ふ
あゝ来ぬ汗ばも迷く猫を捕へて
小さうもせ「ホヽあゝ」さう方の
猫いかもゝ方ふ捕へて
あげる緑がるい猫が
欲くべ地の猫とお捕
へねべせ比方の猫い
大切る猫扱ふお
茶方ふ「ちゝを
ぬ「その大切
る猫おくべ
如何の外敬歩をさせる
さる一見いを使ある

金猫初ふも
ゝ十円徒牢
ませね万を迷く食べ
うぬゝ元返し紙下ざるませ「ホヽ
▲蕎ゝとも衣を軍く性て絡
側の用向うて平ゝてる処を
些方の
猫ふ
その
魚の奥
を鳴
いでゝ
加て逃
さ十銭や
二十銭の れ
ゝべ厭
ひませ
ぬゞ金

その方張今まで
覗見ハ
ゝ猫
拘猫
ふ外
歩を
させるなとゝふ器告
ハ朱ご図ねシテ又比方
の猫どのゞ何ゝて毛方の
紙幣と御へるまう
一円金のもねね
指柄「ヲ、その由来ハ
ゝとも
ゝ十円の紙幣と煮魚の醤汁のまゝ

こりゃ笑ゝのそんあらか弟ゞ蕪匂をあで金ねまゝ
肴の汁み煮ゝもる
其臭を嗅ぎでもちの
猫ゞ御へて逃ま
ゞ太金さるみの
汁へ煮ゝ汁りゞ
ふ拘て与る物をた
ら見るとハ三家
の児軍でも代
剛化の比時前ゝそんな
頑薯ハござりませ
まハ乗理で猫ゞ
ム、ヤリくと食て金

「サアム、ヤリく
食べてのゝぶハ
海まゝ比ハ其
ゝ十円ゝ些方の
猫ゞ食さうハ
些方でそ見ゝ
俵補あさう
ぎハ成ませ
まハコリヤ「汚も
汚さませね
ゝ十円とお見
あ見と樓り云て
ハ姜「つゞく

「早るをお松どのの冷笑ひ
「ようこそ」

▲家とあらば
女房と共に
ども飛まで承歌の
些と面白

▲食物長べ列家も彼是も
甘ぢるい辛ぬきも
見もこなる猫の
とぐ又十円ぐ渡
さ上ぶべ寧を
猫を捕へく
のって皮
ありと剥て
腹余せん
サア金を
渡もろ
猫を

▲家あり
破れされ
なりませぬ
くらかえー
ゆーまきと
云ふてお豊へ
驚とお俗へ
密係をこつそら
見ーゥ南をこ▲

せー色をこせを「破れ
されー

そりゃ
なるほど
些方の
猫ゲ又

いつまでもとも接
投関うんと通め
よこるをお松
へ接も
鼻先
侍
遇ひ
「ろ
こ
こ
世
間の
人を育月の四ろふ
思ろーやるゲ

つぎき
金体始めふ此方の猫と仏の羽
なつさ吹おなさつさ此方でゑる
ともかりぐぎ
通
猫の威
ねこ
ねこ
ねこ

三編
中

五人殲

苦麿物語

上編

中之巻

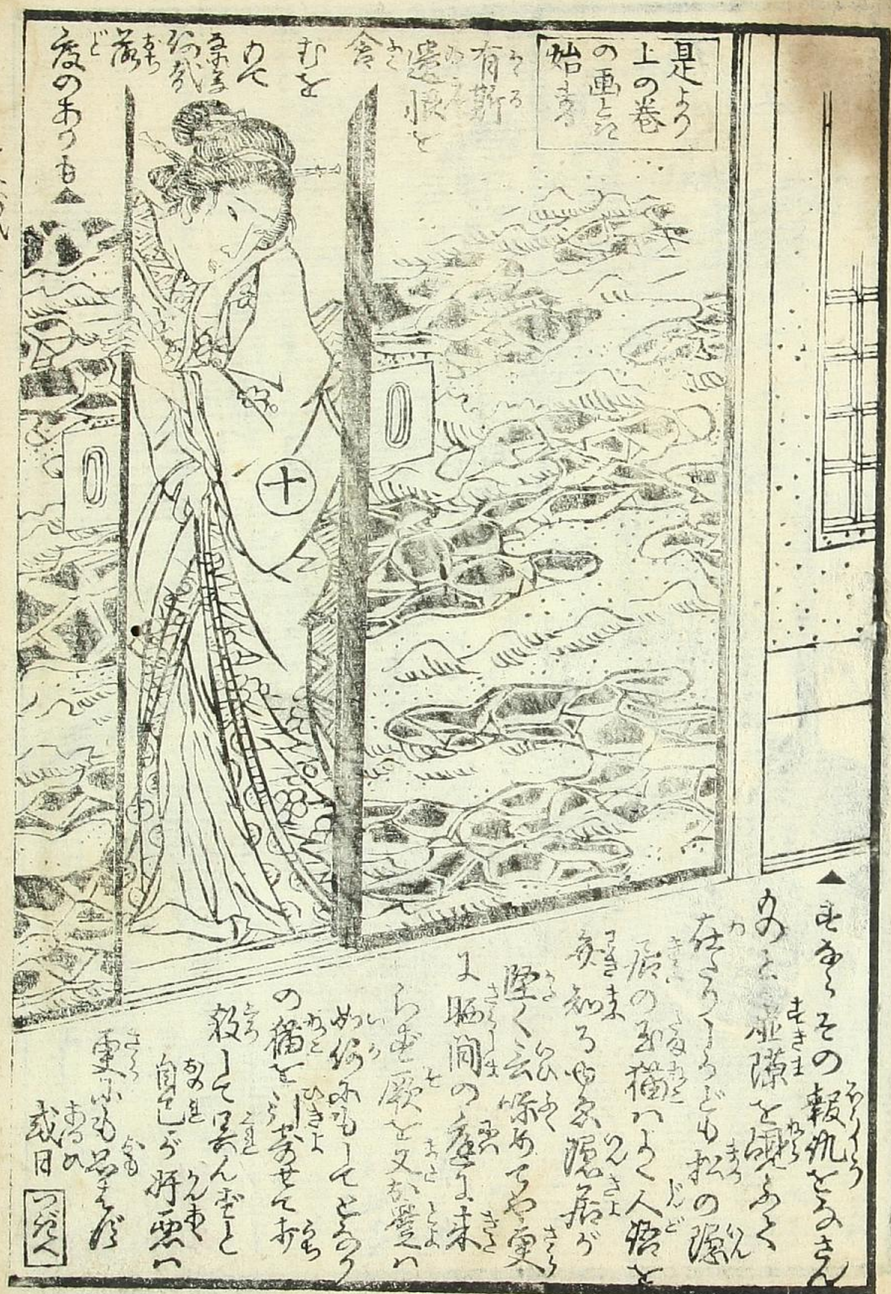
種清編淵

房種

画

延寿堂

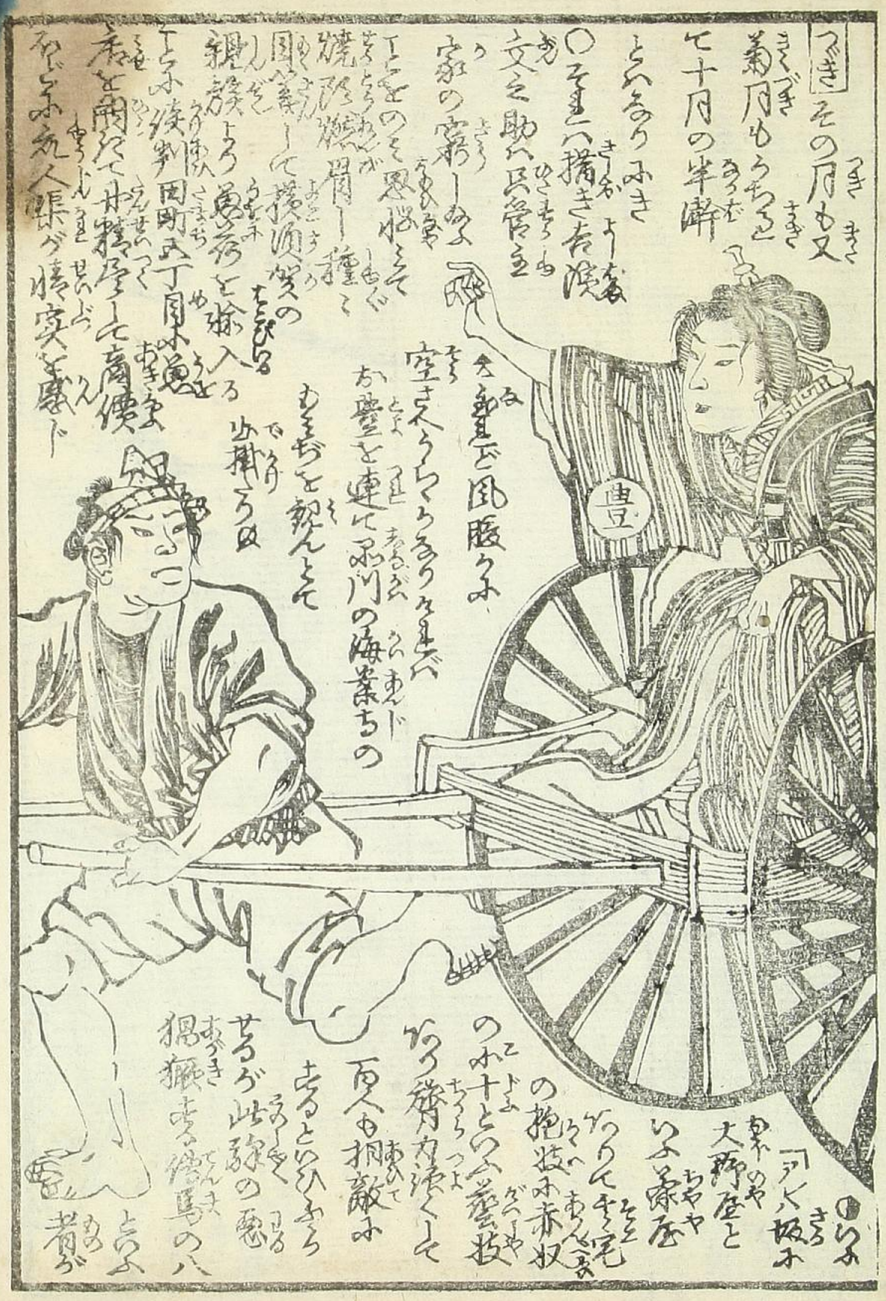
上梓



五人殲 十

松

つぎ その月も又
菊月もうちつゞき
七十月の半辭
とんちうふき
○そまへ搗き者洗
文之助へ兵管之
家の家ーぬ
エとをのそ思ひそて
燒酎胃ー種く
国へ帰ーて接頭賀の
親族より黄金を送入る
とふ後判四町五丁目木綿
店を開て井精屋ーと商傳
ぐとふ元人張ゲ時寅を廉ト



全盛ゴ風服ゥふ
空さえうちうちうちうちそそ
お豊を連て永川の海岸ちの
むこぎを契んとそ
少摂ろ図
のみ十とうく蓋枝
の絶枝ふ赤奴
なろ脇力強くして
百人も相敵ふ
さるとうふふろ
さるゲ此家の悪
猛獣ぞ徳馬の八
者ゲ

①いふ坂ふ
大阪屋と
いふ家屋

先を競ふて買ふ図ふ一番
の富を成そ者八を家を
小十 通好
有ぐの強力を誇て
図ひとた
満家のもれ
とふ八疾くとうそもの
虚を飛ふとうふ
行事ゲうとをよ社役ゲ
お豊ふ一下泡吹せて異んと
法より車を乗せつも岩山
ぎて坂み入るふ行ふ
知ゲぞ人蠢ぎるゆ家
ぎと車ふ乗ぬるふ
車ふ八ぎゼーと車を
牽ふ社ぎ人舞を足
行者せ。その人舞を足
据ケて劇急ーく告て
ぬ山ーたどりて源吾八図

小十の脱兎へふと入ぎとゆ
いふるゆう捕へらぎて徳馬の
八八天竺の行ぎ徳馬ぎ
容ふ多ぎふ捕人でぞぞへぎと
実ぞ社ぎ松ぎ家のうちふ行ふ
実ーー橋の側ふる石泉と
いふ割素者ふ投ゲ入ん
べふ家のふ十と拾だうふ十ハ
今日も歳空爽ふ動ぎうと
足ぞて強く路刑の歳ぎる
転ぎて松の張屋のぎふ出
うう絶ぞ社ぎ性質勇烈
ぎ社ぎ社義も素ぎ公俗

つゞき

強く感佩なり「アヽ勤勞なり」

世ふ痛辛なるものはあれど和女帝い

余經盈縮と勞力さうと不足さるなり

足いちろ呂津さえ更ふ丸さ元絵

勢なるの渡のぐ牧中の英傑烈女

また世ろへ又二人とゆるき奇女なる

浩る女性と者ろ元せんば

雄ち業まる者ちろんや是

い此二ふの煙頭ふさどひとつ

い和女帝ふ意烈と業まるあり

とそ金十四と紙ふ色とて孟とそふ駅ふ

小十八ふろ廣深の女ふ其べその人まと

更ふ更けぎ「何ふ位勢と

遠ふとゆべ腰賜をた載さて

べきふこ法一澤ふ

山開海晏寺

つき
ざるべ
運金を
ら且そ
猫ふれと
引ろせ
十

十八娘結と
方ホ
小十と
名屋でち教こ
ある所安一七名
と云雅き美名
水の
中へ光こ
と仰ま
承ル
彼ち豊
ぬま女ハ
ちゆ木も春の
敵木抑さ
豊

つぎき 通好若い素人さんの情人さん
年増茶源く契り中あり」と一昨年の
春よりして彼お豊お徳らうさと手淚い
ふりへ旦暗もせぎ然れども若い愛結欲
新よ身をあたるく欲女おゆくい人い恨さぎ
吾身の卑怯を悔るのを今日まぎるー
せうう茶のお頼さあり とのふともに「こ」こう頼む
お豊を目ゆめのこ安と実結として立拳ると
ハヨ結ぶくその亜妓もお豊もとの石衆の
真の房内ゆ
欲でゐる▲

十

▲お初が弁と解ー
去ってお通好お豊が欲で
ゐる真の房の客ふを何ゆ
なう岸月通好そう暖うるるふ茶ぶて海異ちの
茶を頼んとそお豊と共よふ川よ探び来てとの
石衆まで一欲ゐー変ふ海
者を貴らして海異るふ
列うんとせー
ゐふ豊ゆ
十ゐふ弁図

▲こまこん
紛くかくして
まゆ通好
と海出てよト教示こ小十ハ
海賊ぞうとゆよう早く去

図こまこんの
輾轉と模
陳る様を
舎こん
の
上前尾ゆ
是とゆ十ハ
勝亀

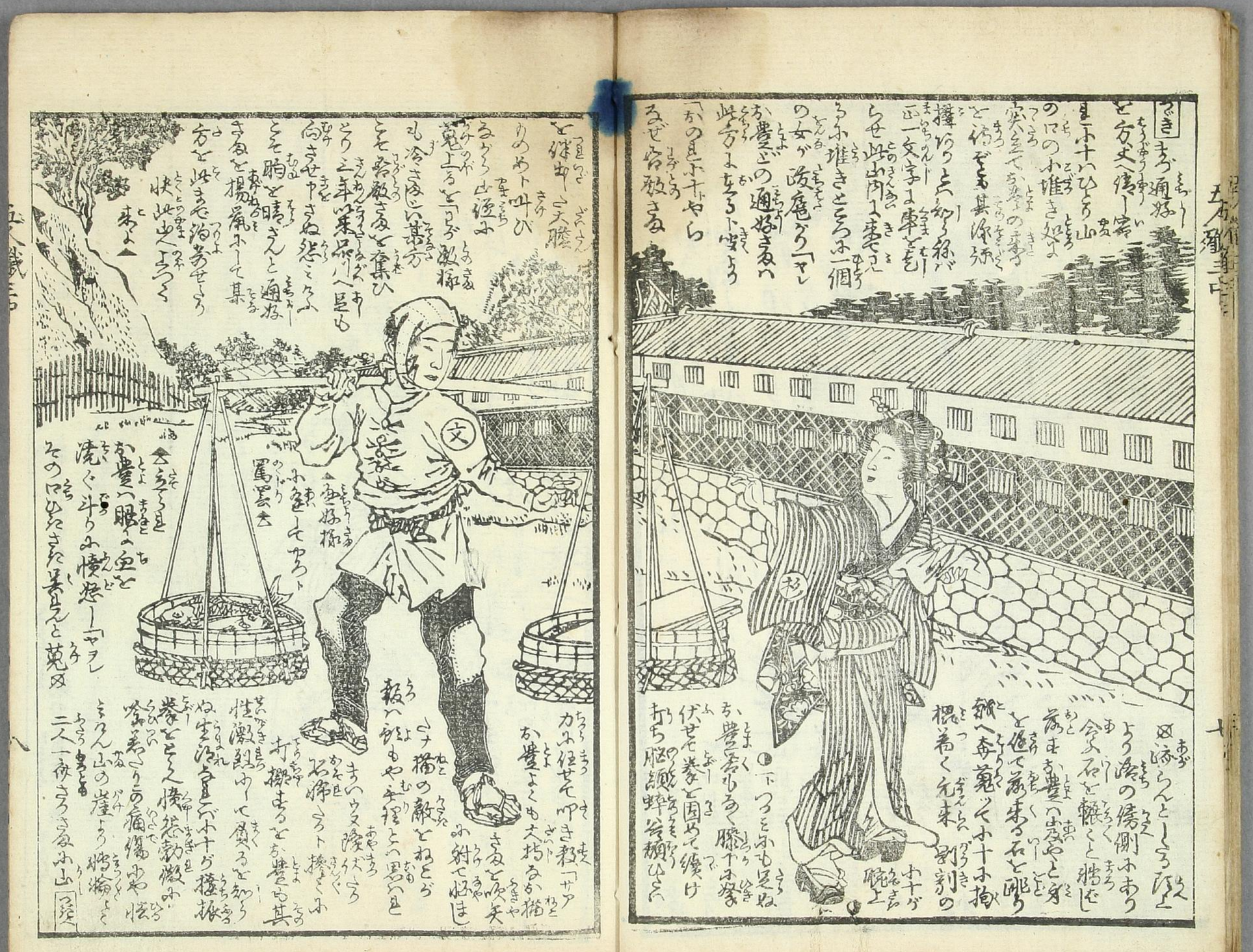
つゞき

中るの紙戸に寸間て「耳扨
ましとふち久振りト夫掛らとて
信清拙ふさてび火の弟く
和好ゞ「ヨ」ホナウト云ひも
お豊をつ直び背中と向
けて寝く眠る「ちろと
トをおぎまるホ風
翻と赤ろに車いト
腹よろ利く舌今守
ヨ肝の盛ヨそ
打込まと「さゝ
ちくえと海晏ちへ
一刀ようろ「ちまを
さんの確ねうち快く
と振立ら直紙入を

私ゞ
万の銭
ちひま
せろサア
いろろ
ちやいトまと
ちゞや
揉て同車
同ゞぢ
ろても離

ちと
ふんと立戻ると
ち芸「ゆの入
費ハ〆ーぢで

一旦ハせねと比関大連
比国給ゆ書とのろ
生を此ゆち豊ハ
目に光ーと豪家の
女よ婦赤と関だ
海晏ちへちゝぐと
生ろふお豊ハ
丈のごとく踏ろ
晏ち今ゞく車
お花ちつも
二人の母と遠蒐
領て小十ハお
豊を踏ろせ遠蒐さ
せん伎価ゐ五六車と遠
ちや海晏ち人晩入さを


つゞき
まづ通好
と方丈へ伺ひ寄
且下十はひとり山
のにのふ堆き知よ
実を見てお豊の事
と伺ぞも其源氏
撰ばり上知り孫が
正一文字よ事とも
らせ此山河よ事と
らふ堆きとらふ一個
の女が改庵ら「ヤレ
お豊どの通好さあ
此方よとらト実ら
「かの見ふ十やら
るぜ皆敬さあ
文
杉
ふ泳らんとしら泳上
ら泳の傍側ふあり
会又石を輕くと猫を
家ふ豊ふ出やと身
を低て落る石と跳ら
鍋へ奇蒐そふ十ふ抱
槻着く元来 刷刻の
ふ十が 脆上
下つとふも見ぬ
お豊ふ見ら泳ふ滝ふ拳
伏せを拳と固めて縫け
ち脳綴蜂谷頼ひ

を弾中と天膳
りめめト叫び
るらら山逆ふ
蒐上るをトらが敬様
も冷さ後い菓方
こを皆敬さあを集ひ
らら三年菓品ハ人見も
向させやさあ怨こくふ
こを晴を晴さんと通好
さあを揚扇ふして菓
方を此まを泡芳せら
快此必人上つく
文
ふ通好様
蜀器去
お豊ハ眼ハ魚を
洗ぐ斗りみ憤怒ー「ヤレ
その口ひたさた美品と蒐ふ
力ふ任せをゆき教「サア
お豊よくも大拐るふ猫
さあを吹矢
射て怪は
ふナ猫の敵をねとら
敵ハ敵もや手理とハ思ハを
まハウヌ隙ふら
名称ふト撫くふ
打撃まるをお豊ふも其
性激烈ゆ一て爲るをふら
ぬ生汚ふをびふ十ら撮様
拳をとを憤怒勃激ふ
咳ふ考らふ痛傷ふや怪
ふ山の崖ふら猪鍋ふ
二人一夜さらさあふ山

つゞき 後の若男へ義心ぐうこの
▲若るのも多たゞ其中右助のを亜実
▲行高公
みてお琴ゞ頭末を報知らしう稽らゞ
世話と亜中
不同ちゞとも頭まり知らしう知う
ねたど実者と知う行ゞ
ゞねまちんと思ゞ
遠ちゞ毋ゞの年へ
行てまゞと
ゞ
右助ゞ
文
実けるゞ
一ゞ
右助ゞ
ゞ
羽ひ亜実と多と実
しても彼郎中ゞ入込ん多
ゞ右縁ゞ多揚棒ゞ
ゞのゞゞ多ゞ
備不ゞゞや頭比同ゞま

知れざると深く頭同色るゞ
其家ゞて同くと
ゞも推ゞゞ実と
せんゞと書ゞて細深ゞ
ゞる時ゞお琴ゞ悍女彼肥満
女の実面
ゞ移ゞ業
ゞ知ゞ
ゞ
琴
國
つゞき

小倉山青樹榮 昔日新話 泉竜亭是正作 初編より追々出版

這の徳川家の旗下の青木弥太郎小倉菴長吉。唱妓聚ひ春情の事寄暴借強談の悪事青木の細君艱難辛苦を記し繪入の草双紙の綴りなれば近世の珍書なり

假名手本忠臣藏 露光作 芳虎画

延壽百人一首 中本一冊 玉蘭齋画

自縫物譚 豊国画 初編より六十二編まで刊成 故人種員稿 種彦作 柔板菊寿堂主人嘗今日と称せる社主も後編七出板まで聚の者なりし 円氏みづから校庫り一屠 金今つゞきまで板を看病方 陸續ぶ来と伏て希み 明治十年 板元敬白

日本橋通二丁目四番地 延壽堂・林 九屋鉄次郎板元

柳水亭種清作
櫻齋房種重
三編
下

五人
武士
苦鹿
もち持つ

三角
下ち書

房角
ぶ
ぐ
く

稚清
海海

延寿
寿ち板

中の巻
セト
門関業内
甚面
助
助
助

つゞき

怪恨めしく思ひたさとてるあるんが
更に奥さまのお娘さまの愛さまに
とて挙止なるまに
なるさりしみ合と
あつて浅海猴
を聞よるまうめ行ふも
して遠さくぬちち四三方と
元のごとく郵中ふ
お迎へまる
らせんるる

らぶくおん
恨とやきる世じと怒かよ
緋袴をしゝ立ちり迎さる
をへふ練云ゝ琴
をを返迎へんと

なる時
とを以
助八

の茶
いで何と
湯と
主人理を
従徐き
主人と云ふ
柔富と因縁ら失を生く

思ひ一ぶ
お暇の去る
ちもに後今此方へお琴まと
迎へ行るとも中く法治とふ
法さ風婦の挙止ひ絡ど
ぶく主人の客の
迎よとも長の頭て他ちへ必定
あり千鳥と結果さそ四方と
返し迎へんやうみんと幸治の
ふると結びとよ光陰五寿の
ごとく明治十二年とんちうろ表よ
よりの金孫と縁ちるの明と色士族
華族ち為て拾めそ春業く巻と
迎へ富貴の光の黄金と開きて泥池
肉材の猪者とるさく相そ見へ

つづき 続れとも
武田家の門人
機猛之介
不安なる
要不河
も往

▲家滅亡
せん悲しき武道
好者八月
業自ら
果て
在しぬ

かれさてお琴を
母みの内牙金孫
つ支不孝なるべからを
のつ内牙を
貢ぐの
みんめぐ
君猛り
子を喪

文之助
唯一人の
拳動とも
私斧墓
母変へて
きくざりしうべ一万四の公債
ぞ失せて猪てぞ本の同綱
つちようけ関ようけ此度二月も弁搭べ脳弓の

▲らは此ば
料理とせんべ
母と武夜父武助の
麻沈をなると何人て
細紙と出遠地その
羽をの夜お琴を再後
綱坂へ送迎きて
筆汁を助ける屋敷と
出させその准絞をまぐ
筆は此るふせさせ

つぎなる冊は後月の明治十二年二月廿三月迄
なる眺月ろ為法く陸ろ洗たーふ今見へコみて
風加ちろ樹石も微弱まだろ為越見ども
是後文三助い脳風家の奥廃文三ろ
と決ん〜ろ見び密ろふ浸冥の暴家ふ
中元〜お狼さ為へ中〜上ま毛為浪来いく
たびろ主人へお待ちまろ毛とのいども
四吹いまろた為量理の行屋ろを
しそふろび貴女と有効横隔の為ん
退辺ち天毛まろるとか〜毛ぐも打臓き
浪者ろ今文面見ろくんたび見ども
再び母么の四洋へ四ろ為ちあモ〜ち毛ぐ〜
ち天ふ為も母ろ人四財面まろろ毛ぐき
おりてふ月見今手お別見まろ〜上ろい

つゞき
通
文

文
豊

つゞき名を
とるも
一方の
主人
義と
忠臣
いたのべらぼう
逆恨ふい天ぐく
駆後はしまま
べるれば人の
ひとり
数力し
の畳
敷き
走
き

新

ふい
逃げ
ぐく
ろぐ
名ハ天乃の家ん
真ん
廃と
理り
しあへべ
行り迷惑と
裁明して優家ハ
て面戸を害役と
投るその者ハ
矢つも
逃げ死きアレ
汗魔と者裁を
刺さまもぬぐ
肩より

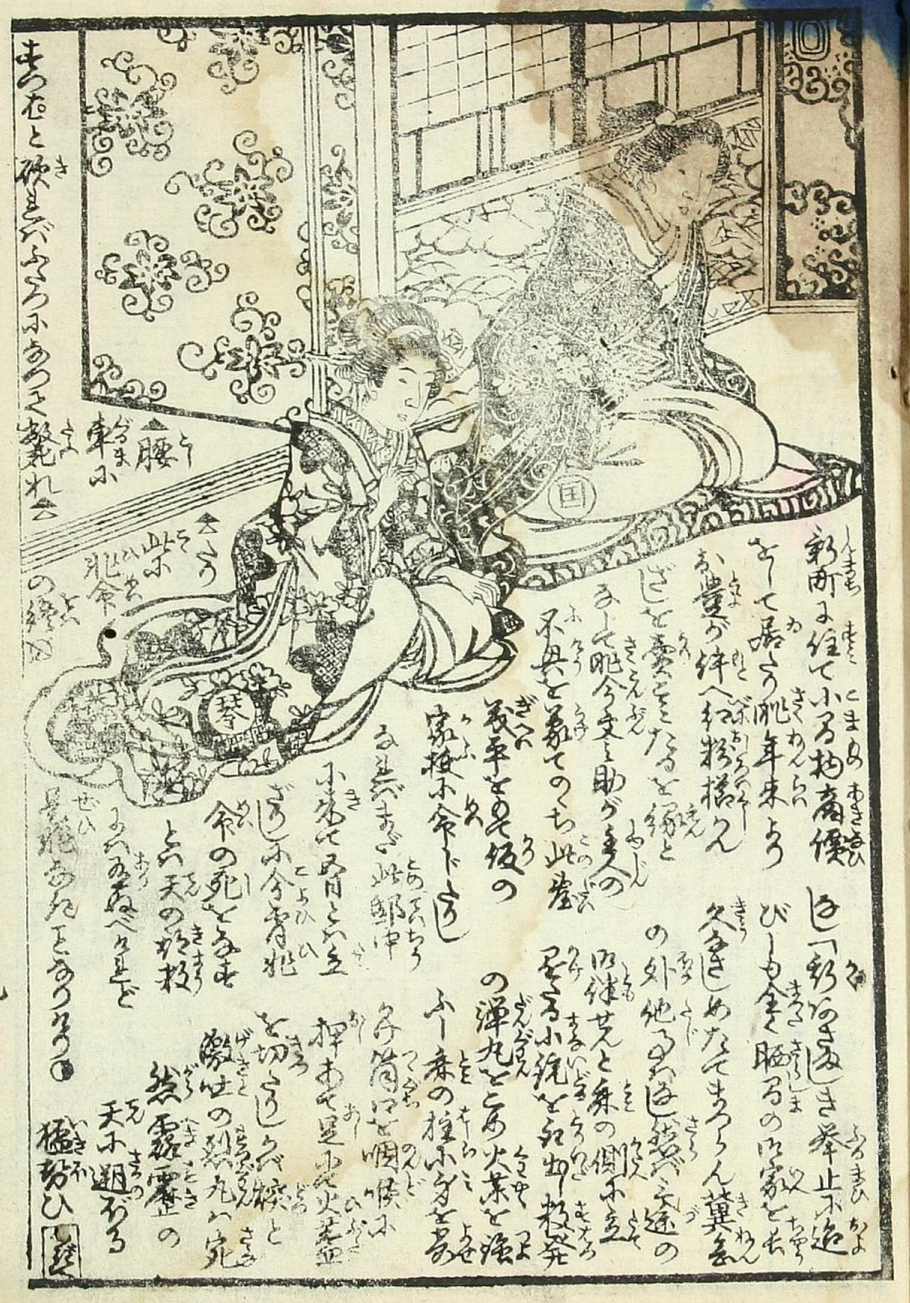
文

豊

竹のそ
水も
つぎ

文
豆

できもの



つゞき

ろて文ゝ助が咽候を貫徹乳
横つく血肉し天井板まで吹き飛ばし
その天井より鮮血流れ滴り零しに最
凛くしく死相あらと後時ろる者佐警戒
せしそのかゝりに廿四日の朝より
驚駭仆れ伏す糸の様ふ立ッさらしに
あるを仆横死の吳相ありと考口称して
見るの者毛と逆てしと云へり
○緒脳間家の後事あるや既より奇怪文
ゝ助が定恩中より恩を出遣しる文富
その鬼女が妻が憤怒ろう怪奇を四方が貞操の
分明瞭ふ顕表ろのみるゝを其の親族ふも
助勝屋力法ろうざるを逆
お琴より脳間家を相続なさしめ
相ふ四の方を同家より迎へ助を
もとめふ相ふ福ら方補助者
勤の後者さえなを衰極
まつく楽よのう苦をまつくして
欲ひよるの日千万歳ハ
ちうあく懲ひ竭しく
時天向日の表と沈
たるい実ゝ文明開化の
御代ゆうにめでたしく

御免明治十二年三月一日
芝区愛宕町二丁目二番地
編輯　櫻澤堂山

柳水亭種清編輯　香朝樓芳春画

小倉山人樹榮　昔日新話　泉竜亭是正作
初編より進々出版
這は徳川家の旗下ふ青木弥太郎小倉菴長吉。唱妓
賊ひふ春情ふ事寄暴借強談の悪事青木の細君艱難
辛苦ふを記し繪入の草紙ふ綴りられば近世の珍書ろう

假名手本忠臣藏　露光作　芳虎画
延壽百人一首　中本一冊　玉蘭齋画

自縫物譚　豊国画
初編より六十二編マテ刻成
故人種員稿種彦作
小板菊寿堂主人當今
目下新作往事を後編と
出板ふ為ふ賊ひ毛ろう
円氏ふ仕度ろう一廣
余人ひつき出板ふ着手方
陸續ふ成て新ふ
明治十年　板元敬白

地本錦繪問屋　延壽堂林　日本橋通二丁目四番地
九屋鉄次郎板元

010190510668